

吉田 裕著

『日本軍兵士―アジア・太平洋戦争の現実』を読んで

中川 義章 陸自78

またまた、安全保障委員会事務局長が、やや畑違いの近現代史の著作を取上げます。

理由は、本書が中央公論新社の2019新書大賞を受賞した話題作だからです。平たく言えば、中公新書随一の売り上げを上げているからです。また内容的には、安全保障論や自衛隊の現役諸君にとつても役に立つ面があるからです。

ともあれ、手元にある14版の帯に「15万部突破」とあるので、借行社会員の皆様もお手に取った方も多いかも知れません。標題からはつきりしているように、多くの借行社会員とは異なるリベラル派・左翼系の著作であり、手に取らなかつた会員も多いのではないかと思います。

大東亜戦争から70有余年を経て御代替わりの時に、本書は国際安全保障学会員の知人が言うには「家が建つほどの威力がある」そうです。この知人は、「銀座で数回飲める位の威力がある」新書を出したいと数年来思っているようですが、実績は2刷がせいぜい。「銀

座で一回」が限界だそうです。普通の軍事・安全保障関係の新書と本書を比較すれば、中央公論新社の力の入れ様と、一般の方々の関心の高さが窺われます。

本書の内容は、概ね一文で表すことが出来ます。すなわち、「アジア・太平洋戦争に従軍した日本軍兵士は、非人間的な環境に置かれて、悲惨な死を迎えた」です。内容的には、会員の皆様にとつて、新しいことは何も書かれていない著作と言つことになりませう。

私が関心を持って、本書を手にとつたのは、従来リベラル派・左翼系の学者・研究者は、兵士に関心を示す人が少なく、人であれば基本的には、いわゆる銃後の女性・子供、そして空襲の民間人犠牲者や沖繩戦の民間人犠牲者に関心の対象としてきました。とはいつても、人そのものに関心があつた訳ではなく、その受けた被害・犠牲に主題があつたのです。

そうなる、日本軍兵士については、徴兵により強制的に苦役に従事させられた「戦争犠牲者」と言うのが彼らの基本姿勢でした。さらに酷い扱いでは、海外において残虐行為を行った加害者、すなわち「戦争犯罪人」や沖繩戦において沖繩の民間人に虐待を行った「犯罪者」のテーマが多いのは、皆様ご存知の通りです。腹立たしいのは、

戦没者の追悼に際して「加害の歴史を忘れるな」という雑音を入れるのを、「人間の良心の叫び」と嘯いていました。唯物論の観点からすれば、人間一人ひとりに大きな意味はないのですから、このような扱いは普通なわけでは

つまり「少し変わったリベラル派・左翼系が出てきたな」ということです。なぜ変化したのか、そのような変化が、なぜ「家が建つほどの威力」を持つに至つたのかに関心を持ち、読破したのです。

「なぜ変化したのか」については、「はじめに」の前書きで、このように述べています「本書では従来の議論を踏まえた上で、切り口を大きく変えて次の三つの問題意識を重視しながら、凄惨な戦場の現実を歴史学の手法で描き出してみたい。それは、戦後歴史学を問い直すこと、『兵士の目線』で『兵士の立ち位置』から戦場をとらえ直してみることで、そして、『帝国陸海軍』の軍事的特性との関連を明らかにすることである」とのことです。

これに加えて、「終章」に理由について補足があり、「端的に言えば、1990年代前後から日本社会の一部に、およそ非現実的で戦場の現実とかけ離れた戦争観が台頭してきたからである」と述べ、「近年の日本陸海軍を礼賛する風潮の中心にあるのは、ペリ

リユー島の戦いである」とまで言い切っています。

つまり、最初に戦後歴史学を担ってきたリベラル派・左翼系の従来の考え方を変化させて、兵士のことを主題とすることをはつきり述べています。なぜかと言うと、戦後歴史学が軍事史研究を忌避していたことを欠落として認め、「戦史」を研究しなくてはならぬいからだそうです。

その目的は、「非現実的な戦争観」を正すためなのです。皆様もご存知のとおり、リベラル派・左翼系の戦後歴史学は、長きに亘り正しい理論を実践しようとする社会党・共産党の政策の理論的根拠を論証するものでした。それでは、誤つた「非現実的な戦争観」を防げなかつたという率直な反省です。

その反省をこめ、靖国借行文庫の部隊史や回想記なども研究対象とし、史料を実証的に分析した成果が本書です。兵士に関するこの分野について、序章、第1章、第2章を使い、ここまですべて網羅的にまとめた著作はないものと思えます。内容については、実証的とは言え、取り扱うべき戦争による死者に対して史料そのものが少なく不完全であり、推論がすべて正しいとまでは言えないのが当前ですが、部分的には大変貴重な結論を導いています。

兵士の死の諸様相が克明に描かれる

ので、反戦を煽るためかと疑われるかもしれませんが、そういうこともなくまさに実証的です。諸先輩の直接の話と同じく、淡々としているだけに、圧倒的な迫力があります。このあたりが、15万部を超えるベストセラーになった理由かもしれません。

等身大の日本軍兵士を描き出すことは、昭和史理解の入口です。一般読者もこの点で事実に興味と関心があるものと思われれます。

そのなかで私は、あまり知られていない（したがって、現役の自衛官たちも準備が不足している）事実を発掘しているのは、さすがに一橋大学名誉教授の歴史学者の実力だと思いますので紹介します。

一つは、戦場における歯科医療の重要性です。二つ目は、精神科医療と休暇の重要性です。三つ目は、動員解除復員時検診と継続治療の必要性です。これは、敗戦という事態では、必要性が分かっているでもできなかった分野ですが、再発マラリアや水虫の治療に30年を越える期間がかかった事例が紹介されています。

第3章と終章は、前半の事実の背景、原因となった「帝国陸海軍」の軍事的特性を、分析しています。内容的には、従来からリベラル派・左翼系が取り上

げてきた日本資本主義の後進性、短期決戦主義からくる兵站の軽視、明治憲法体制に内在する欠陥による国家戦略の不在といった要素の説明があります。

しかし、迫力のある前半と比べて見劣りがします。実証的に説明するための、単なる事実の紹介はありますが、取り扱ふべきその他の膨大な事実が存在することは明らかであり、新書ではどんな歴史学者でも無理な話でしょう。

兵士という切り口から、「帝国陸海軍」の軍事的特性を明らかにすることは失敗しており、竜頭蛇尾の感があります。国力の限界を超えて戦争を行った結果として、兵士の惨状を明らかにしたというところでしょうか。国力の限界について、考えさせられる部分ですが、安全保障論や戦略論に有益だと思われれます。

また、兵士という切り口や兵士の視線では、戦闘までは見えてるでしょうが、「戦争人主体」や「戦略」というレベルを見通すのは難しいことではないかと考えます。なぜならば、「帝国陸海軍」は、戦争を遂行する国家組織として建設されていきました。戦争は、国家の「事業」活動です。そして、戦争には軍事的側面と政治的側面があり、その諸様

相もレベルがあります。軍事的には戦略、作戦術、戦術という思考上の区分もあれば、戦争（武力戦）、戦役、作

戦（会戦）、戦闘、格闘という空間・時間的区分もあります。それらの戦争の諸様相の原因・要因として軍事的特性があるはずであり、兵士という切り口は、あまりにもマイクロからのアプローチであり、無理がありそうです。

そうは言っても、著者の問題認識にある通り、「非現実的な戦争観」を正すことは重要です。ほぼ全編を通して、歴史学者という立場に徹し、実証的な論証に徹して、戦没者の慰霊も追悼も顕彰も論じないで、価値観や政治的主張の押し付けが無く、事実の追求をひたすら行う姿勢から「非現実的な戦争観」を感じるところが無いので、一般読者に非常に受けているようです。

この点では、画龍点睛を欠く点があるので、会員の皆様に紹介します。終章におけるペリリュー島の戦いの評価です。ついに最後になって、馬脚を現し、衣の下の鎧が見えたと解釈されても良いのですが、そうではなくて、軍事の素養がないために作戦・戦闘の評価が出来ていないと思われれます。道は如何に遠くとも、この手の歴史学者を啓蒙教育するのも偕行社の使命でしょう。

著者は、その評価に相当自信がある様で、「日本軍礼賛本」として名指しで某作家の著書を批判しています。その「礼賛」されている例が、ペリリュー

島守備隊です。日本陸軍歩兵第2聯隊（水戸）及び同配属部隊の勇者のために、ほぼ誤解と言ってよい著者の一方的判断を指摘しておきます。

著者は、「戦死者でくらべると、日本軍1万0022人に対して（米軍は）1950人にとどまること、米軍の損害の38%は上陸作戦と飛行場の制圧作戦期間のものであること」を理由として、「日本軍の戦闘力に対する過大評価とある種の思い入れがある」としています。

ペリリュー島守備隊が対戦した米軍は、単に米軍地上部隊である第1海兵師団、次いで米陸軍第81師団だけでなく、米海軍部隊の戦艦（主砲は口径40cm）を含む艦艇と航空機多数であり、米軍は数百倍の砲弾量を使用して圧倒的優勢な戦いをしていきます。兵力比で表現するのは難しいのですが、10倍以上の敵に陸海空から3次元的に完全包囲され袋叩きにされた戦闘でした。

結果として、米軍兵士を見る前に戦死傷した兵士が多数存在する日本軍の兵士にとって「極めて不利な戦闘条件」下で、かろうじて会敵できた米軍地上部隊に対し、戦死傷者数でほぼ互角の損害を与えています。結果的に、作戦

期間が長期化して、第1海兵師団の戦力が消耗し、海兵隊にとっては屈辱の事態である「海兵師団撤退、陸軍師団

投入」を起こさせている。戦史を分析すると、戦略的あるいは作戦的な面で批判はあるでしょうが、地上戦闘の分野では、ペリリュー島守備隊の極めて粘り強い戦闘と、それを可能にした敢闘精神の保持、堅忍不拔の意思と部隊団結の強さが浮かび上がります。すくなくとも、日本陸軍歩兵第2聯隊（水戸）及び同配属部隊は精鋭であり、その兵士も強かったのです。

この点は、「礼賛する・しない」の問題ではなく、理解する必要がある。「礼賛」しているという批判を受ける著書については、本書と比較して実証的な記述が少ない傾向があり、このような実証的アプローチで迫る歴史学者が出てくるようになると、一般読者の味方として、鼻根の引き倒しになりかねないことが心配です。

先に述べたように、一般読者は、実証的な事実に興味と関心があることを、我々も理解して研究に励む必要があります。

なお、ここで私が気付いた点を補足しておきます。著者は一橋大学名誉教授であると聞かれると、いろいろなことを思い出された会員がおられると思います。日本陸軍関係者で、高名な一橋大学名誉教授は、歴史学者の故・藤原彰氏（士55、歴史学研究会委員長、日本学術会議会員）が居られました。

本書の中で、1回言及があり、参考文献の中に著作が含まれています。著者と故・藤原教授との関係など大変気になります。手が付いていません。

なお、故・藤原教授は、現役の一橋大学教授時代に、4月号で紹介した偕行社の座談会に出席されました。半藤一利氏の要約版には、発言が無かったため紹介されていないのですが、第1回の記録には、写真付きで紹介があつたことを確認しています。当時から、リベラル派・左翼系の歴史学者でした。偕行社は思想信条にはとらわれずに幅広い方に集まっていたので、近現代史の研究をしていた証左です。とすると、もしかしたら、お弟子さんとの共同研究も夢ではないのかもかもしれません。

広告目次

- (株) セレモア……………表紙3
- (株) 東京都民互助会……………表紙3
- ローレルバンクマシン(株)……………表紙4
- (株) 全国儀式サービス……………6
- (株) 武蔵富装……………47
- 信和株式会社……………47
- (株) 和泉家石材店……………48

本誌へ広告掲載をご希望の方は、事務局へご用命下さい。